

NEWS

病院ニュース

2010年1月 第20号 (年4回発行)

主な内容

- 1面 ●<千葉市長来院>お互いに連携して質の高い医療環境を
●<病院長新年挨拶>新年を迎えて、医療の新たな一歩
- 2面 ●病院でクリスマス気分満喫！
●<学習・情報コーナー>勉強しましょう、病気や医療のこと
●患者さんの声
- 3面 ●研修重ね、すでに80名が認定証取得
●<ミニニュース>入院・外来患者満足度調査/千葉大学病院有識者懇談会/
がん患者サロン開設/乳がん学習会/千葉大学病院に液晶TV11台を寄贈
- 4面 ●<フリートーク>佐藤兼重(形成・美容外科教授)
●<亥鼻むかし・昔>①七天王塚と羽衣伝説
●<トピックス>メタボ、あぶら、ウエスト



千葉大学医学部附属病院

〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL 043-222-7171 (代表)

http://www.ho.chiba-u.ac.jp/

新年を迎えて、 医療の新たな一歩

病院長 河野 陽一



皆様、新年明けましておめでとうございます。今年も千葉大学病院は、より優れた医療環境の整備を進めてまいります。

インフルエンザの流行を受けて、本院では「インフルエンザ対策会議」を立ち上げ、日ごとに感染状況など情報収集と分析を行い、対応策を発信してきました。職員が元気に働いていることが、患者の皆様に必要な医療を提供するための基本の一つであり、全職員の健康チェックを毎日実施しています。インフルエンザワクチンの入手には努力しておりますが、患者の皆様にご心配をおかけしていることと存じます。引き続きインフルエンザ感染対策に努めます。

昨年7月には周産期母性科、小児外科、小児科がある「みなみ棟」の改修工事が終了しました。「みなみ棟」では、小児科・小児外科の3階病棟の壁に動物達が主人公の街の絵を描き、少しでも入院している子どもたちが安らげるように心がけました。また、新生児集中治療室(NICU)を整備し、母親のお産から赤ちゃんまでをトータルに治療できる医療システムをつくりました。

現在は「にし棟」の改修工事が始まっております。「にし棟」の改修工事は来年春の予定ですが、その後も外来棟や中央診療棟の新設などしばらくは工事が続きます。本院の再開発・新設工事が予定通りにいきますと、以前の病院に比べると2~3倍の規模となり、より幅広い診療ができる病院になります。もちろん病院の外側が新しくなるばかりではなく、患者の皆様が安心して治療を受けられる病院として、医療レベルをさらに高めていく計画も進行中です。

千葉大学病院のもう一つの重要な役割として、県内の地域病院との連携の下に重症患者の方々を受け入れ、千葉県の医療の要としての活動があります。千葉県の医療機関や行政機関とも連携ネットワークが構築されており、互いにしっかりと手を組み、千葉県の医療がわが国のモデルになることを目指し地域医療に取り組んでまいります。

今年も患者の皆様とともに歩む千葉大学病院でありたいと職員一同心より願っております。

皆様にとって佳い1年でありませう、お祈り申し上げます。

いの はな コラム

先日、ガスコンロを買い換えた。テレビでよく宣伝をしているフラットなガラストップで、メタルのつまみ類が美しいアレだ。今はやりのIHという選択肢もあるが、個人的にはまったく迷いはなかった。

というのも、私は週末になると七輪に炭火を起こし、焼肉、焼き鳥や秋刀魚、年に1回くらいはマツタケなどを焼いて悦に入っている炎マニアだからだ。本当は暖炉が欲しいが、予算の関係であくまで七輪。炎を見ているのは飽きないものだ。

1/fゆらぎ理論というのがあって、周波数に反比例してパワーの密度が規則正しさから微妙に乖離変動することだそうで、炎のゆれ方のほか、波の音、風の吹き方、心臓の鼓動など、自然界の普遍的な現象だそうだ。

人間はこの1/fゆらぎの中に身をおくと、安らぐとも言われている。「早く焼いて食べさせろ」という周囲のプレッシャーもあるが、飽きずに炎を眺めている時間は、安らぎの時間だったのかも。

ところで、今回のコンロ買い替えて、大きな発見をした。秋刀魚は炭火で焼くのが一番うまい——と信じていたが、両面から火の出るグリルで焼いたほうが、表面パリッとして、中はさくさく、圧倒的にうまい。

これまでの炭火人生はなんだったのか。こんなところでも、常識にとらわれてはいけないうんと実感した次第。ちなみに、味の感じ方は好みがありますし、もしかしたらIHが一番おいしい可能性もありますので念のため。
(脳神経外科 岩立康男)



熊谷千葉市長が 千葉大学病院を視察

お互いに連携して 質の高い医療環境を

交通機関整備も重要

連携して質の高い医療環境の実現を

昨年10月20日、千葉市の熊谷俊人市長が千葉大学病院を視察。その中で熊谷市長は、病院の抱えているさまざまな課題について深い理解を示し、「お互いに協力し合って、市民が安心できる医療の実現に努力したい」との決意を語りました。

の様子を視察、病院関係職員から説明を受けました。
千葉大学病院は、建設からすでに30年が経過し、現在では1日あたりの外来患者数が、設計時に想定された1,200人を大きく上回る約2,000人となっており、すでに超えている状態。「外来患者数は今後増加していくことが予想され、本院ではこれに対応するため



意見交換会の様子

活発な意見交換会

新たな外来診療棟を建設する計画を進めている。また、通院・通学・通勤が重なる朝夕の混雑時には、バスが恒常的に満席となっており、交通機関の整備も今後併せて進めていく必要があるとの話に、熊谷市長は質問をまじえながら熱心に耳を傾けていました。

続いて行われた院内視察では、手術部とNICU、みなみ棟の小児科・NICU新生児特定集中治療室を訪れ、各担当医師より医療現場の現状説明を受けました。小児科病棟を訪れた際には、病棟の壁面に描かれた絵を携帯電話で撮影するなど、大変興味深そうに見学していました。視察を終えた後は、場所を会議室に移して「意見交換会」。山本副病院長より「地域医療を見据えた千葉大学病院の再開発計画について」、高林病院長補佐より「地域医療の課題と千葉大学の役割について」と題するプレゼンテーションがあり、千葉大学病院の将来戦略や病院に課せられた役割について説明を行うとともに、

河野病院長、中谷医学研究院長からは、「こうした役割を果たすためには、千葉都市モノレールの延伸事業再開がせひとも必要である」との意見が述べられました。
意見交換の中で熊谷市長は、「今回の訪問で、千葉大学の将来的戦略を十分理解できた。千葉大病院へのアクセスについても、現状では十分とは考えていない。千葉都市モノレールの延伸事業は、中止ではなく凍結であり、将来の再開の可能性を否定するものではない。千葉市の財政はここ2、3年ほどかなり厳しい状況にある。当面は、バスの増発で対応することを検討したい」と加えて「総合的な交通政策の方向性を検討する有識者会議を平成22年度に立ち上げるので、その中でもこの問題について審議していくことを考えている」と語りました。
千葉市と千葉大学病院では、今後も地域医療における相互の役割について理解を深めていくとともに、様々な医療問題についても協力して取り組んでいくために、このような意見交換を行う機会を設けていく予定です。

病院でクリスマス気分満喫!



ヒュギエイアの庭にイルミネーション

師走に入り一段と厳しい寒さを迎えた12月3日、外来診療棟地下1階入口からバスロータリーへと続く「ヒュギエイアの庭」に、クリスマスイルミネーションが設置されました。

千葉大学病院では、年に数回、外来ホールにおいて患者さんに心の安らぎを感じていただくために、各種コンサートを開催してきましたが、昨年は新型インフルエンザの流行により、クリスマスコンサートの開催が中止となりました。

このコンサートに代わるものを模



ランプシェードで飾られたモニュメント

団法人同仁会の協力のもとに飾り付けを行いました。

イルミネーションは、12月3日から約1カ月間、16時30分から21時までのわずかな時間ですが「ヒュギエイアの庭を美しく彩り、「きれいねえ」「素晴らしい」と感嘆の声を交わす患者さんやご家族の方々と、池の周りは華やかで、にぎやかなひと時を迎えています。

このほか院内には、入院患者さんと千葉大学教育学部の学生が共同製作したランプシェードで飾り付けられたクリスマスリースや、星型に組まれた木製のモニュメントが立てられ、来院した方々の目を楽しませていました。

索していたところ、患者さんの心の安らぎと、暗い世相を少しでも明るくできればとの思いから、例年3、4本のイルミネーションでささやかに飾り付けられている「ヒュギエイアの庭を、より華やかに飾り付けようか」との案が出され、財

***ヒュギエイア＝ギリシア神話に登場する女神で、健康の維持や衛生を司る。医神アスクレピオスの娘。**

勉強しましょう、病気や医療のこと

●学習・情報コーナー

外来ホール2階エスカレーター脇に「学習・情報コーナー」が設置されているのをご存知でしょうか?このコーナーは、患者さんやご家族自らが、医学や医療の情報を収集し、正しい知識を得、積極的な治療・療養への参加を促すとともに、来院時間の有効活用を図り、病院の利用満足度を高めることを目的として、平成19年5月に設置したものです。

コーナーには、パソコン(インターネット利用可能)が2台と、医学・医療関連図書約250冊のほか、医療関連案内パンフレット等が用意してあり、自由にご利用いただくことができます。

図書のご利用は、コーナー内のみです。待合室等への持ち出しはできませんが、パンフレッ

ト類につきましては、ご自由にお持ちいただけます。また、パソコン台数に限りがありますので、譲り合ってください。(ご利用時間の目安は1時間以内)

利用時間は、平日午前9時より午後4時30分までとなっています。

なお、コーナー内での飲食・携帯電話の使用はご遠慮ください。



患者さんの声

皆様の声にお答えします

回診のとき携帯はマナーモードに

Q 本日、産婦人科の教授回診ということで、教授とともに何人かの研修医の方々もまわっていらつしやいましたが、その中の男性研修医の方の携帯電話が回診中に鳴りました。その方は、その場で「もしもし」と一言一言会話をし、外に出ましたが、見ていてあまり気分がいいものではありませんでした。

本来、回診は患者と医師の1対1の対話により、現在の病状を見たり、気持ちを考えたりする時間だと思えます。その中で電話が鳴り、その場の会話が入るといことは、患者の側からすると片手間に診られているようで、とても嫌な気分です。

特に病棟では、患者の携帯はマナーモードにセットし、会話する際は病室を出なければならぬとされています。スタッフの皆さんも、せめて回診の時だけは、携帯をマナーモードにセットし、どうしても会話をしなければならぬときは、患者に対して不快にならないように一礼して、少し離れたところで通話するくらいの配慮があってもいいのではないのでしょうか?

A 不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。ご指摘の通り、昼夜を問わず、現在業務用の電波の弱いPHSは必ずしもマナーモードにしておりません。当科では、分娩、緊急手術、救急搬送など一刻を争う対応が必要な状況が絶えず生じる可能性があり、確実に連絡が取れる必要があります。

現行では、PHSでの連絡があつた場合、すぐに病室を退出し、連絡を取らうよう、医局内スタッフに周知いたしました。

ひがし棟にも欲しいポスト

Q 9階に入院中の者ですが、ひがし棟にもポストが欲しいです。にし棟の地下にしかポストがないので、私のような者にはとても不便です。よろしくお願いします。

A 貴重なご意見ありがとうございます。検討の結果、ひがし棟1階のコンピュースタア内にポストを設置いたしましたので、ご利用ください。

展望レストランにもお茶のサービスを

Q 展望レストラン「ヴァンセーヌ」の食事内容は和洋食ですが、飲み物は冷たいお水だけ。おそはや天井の後には、やはりホッと温かいお茶が飲みたいものではないでしょうか?

A ご不便をおかけし、誠に申し訳ございません。展望レストランにつきましては、お申し出ただけは温かいお茶も提供できるようになりました。ホールスタッフに、お気軽にお声かけください。貴重なご意見ありがとうございました。

研修を重ね、すでに 80名が認定証取得

看護師による点滴



外来や病棟で、看護師に点滴（静脈ライン確保）を入れてもらったという患者さんはいらっしゃいますか？

看護師が点滴や注射をするのは当たり前かもしれませんが、千葉大学病院では、昨年より看護師が点

滴を行うようになりました。「なぜ今なのか？」と聞くと、大学病院が医療機関であることから、従来は医師を中心に行ってききましたが、入院医療に対応する看護師の増員が図られたこともあり、研修を重ねた看護師も行うことになりました。本院では医師・看護師・薬剤師など、様々な職種業務の見直しを含め、委員会を設置して検討を重ねてまいりましたが、「看護師による静脈ライン確保についての病院の方針が決定し、昨年の4月より看護師の研修を開始しております。」

研修は、『看護師が末梢静脈留置針を安全に実施するための知識・技術を習得する』という目的で、総合医療教育研修センター及び診療科の医師の協力のもと、講義とシミュレーター（人体モデル）を用いた技術研修で研鑽を積んでいます。

本院では、この研修後さらに病棟で実施研修を行った看護師へ「末梢静脈留置針挿入ライセンス」を付与し、晴れて患者さんに点滴ができるという認定制度をとっています。

認定証を取得した看護師は80数名になり、外来や病棟で活躍しています。患者さんにとって安全で安楽に、そして安心して任せられる看護師を目指して日々頑張っています。

mini news

10人に9人は「満足」か「概ね満足」

●入院・外来患者満足度調査

千葉大学病院の入院・外来患者満足度調査(21年度分)がこのほどまとまりました。この調査は、本院の医療環境に対する皆様の満足度を把握し、サービス向上を推進する目的で平成18年度より毎年実施しています。今回は、昨年10月26日から5日間、入院および外来の患者さんに対してアンケート調査をしました。毎回1000人以上の方々にご回答をいただいています。

これまでの調査からは、平成18年からの立体駐車場の利用開始によって待ち時間が短縮してきていること、また平成20年には「ひがし棟」がオープンし、病棟内での快適性が向上していることなどが分かりました。今年の結果では、入院中の医師・看護師などの医療スタッフの対応に90%以上の入院患者さんが、「満足」か「概ね満足」と回答しています。

さらに、およそ4分の3の方がご家族・ご友人に「千葉大病院での療養を勧めたい」と思っていることが分かりました。この調査の詳細は本院のHPに掲載しますので、ぜひご覧ください。

気楽に懇談、情報交換にご利用ください

●がん患者サロン開設

2009年秋より、がん相談支援センターでは「がん患者サロン」を開設しました。このサロンは、がん相談支援センター（地域医療連携部内）の相談室を毎月第4木曜日に無料開放するもので、がん患者さんやご家族同士で自由に情報交換していただくことを目的としています。患者さんやご家族が気兼ねなく話せるよう、病院スタッフは加わらないことにしています。

まだ開設間もなく、これから利用される方々のご意見やご要望を伺いながら、できる限り多くの方にご利用していただけるよう運営してまいります。

なお、ご利用にあたっては、事前のお申し込みが必要となります。詳細につきましては、下記までお気軽にお問合せください。また、当院HP「がん情報サイト」でもご覧いただけます。

お問い合わせ がん相談支援センター（にし棟地下1階 地域医療連携部内）

【直通tel】043-226-2698 【fax】043-226-2632



開設されたがん患者サロン

質の高い医療、病院運営などを議論

●千葉大学病院有識者懇談会

十分な医師の確保と、質の高い医療の実践を——千葉大学病院では、毎年度開催している「有識者懇談会」を昨年12月9日に開催しました。

出席したのは、加賀美幸子氏(千葉市女性センター名誉館長)、土屋秀雄氏(株式会社 千葉日报社相談役)、手島英男氏(千葉中央会計事務所所長)、橋本照穂氏(大本山成田山新勝寺貫首)、早川恒雄氏(株式会社 千葉銀行相談役)、松永敏子氏(社団法人 千葉県看護協会会長)ら、千葉県各界を代表する有識者6名。

この懇談会は、千葉大学病院の実情を理解していただくとともに、学外の有識者から、医療のあり方や病院の運営などについて自由に意見交換していただくことが目的で、この日は「優れた医師を確保するため、どんな見通しを持っているのか？」といった質問や「女性が医療現場でいきいきと継続して働ける仕組みをつくるべき」といった提言など、活発な議論が行われました。



医療のあるべき姿や千葉大学病院の運営など意見交換をする出席者

専門家の話や患者さんの交流も

●乳がん学習会

千葉大学病院では、5年前より2カ月に1回の頻度で、乳がんの患者さんご家族を対象にした学習会を開催しています。

学習会の内容は、乳がんという病気や治療後に身体や心に起こりうる症状とその対処方法などについて、医師や看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーといった様々な職種の専門家がお話します。

講義の後は、お茶菓子を食べながら患者さん同士で交流していただく時間を設けています。参加された患者さんやご家族からは「乳がんに関する知識を得ることができた」「自分の身体の症状について理解することができた」「うやむやなことが解消できた」「他の患者さんと話すことができて、不安が軽くなった」といったご意見をいただいています。学習会は、今後も継続して開催していきたいと思っております。

今後の学習会予定(テーマ)
●平成22年2月20日(土)
痛みについて

詳しい内容、参加方法につきましては、病院HP内「がん情報サイト」をご欄ください。
(乳がん看護認定看護師 大野朋加)

千葉大学病院に液晶TV11台を寄贈

●臨床医学研究助成会より



千葉大学医学部附属病院臨床医学研究助成会は、昭和53年に県内の医療・医学研究の中核的な役割を担う本院の臨床医学研究、診療の充実を図るために設立されました。

現在も地域貢献に対する意識の高い千葉県内の有力企業40社および個人により組織され、今日まで30年にわたり経済的なご支援をいただいています。

このたび、助成会設立30周年を記念して記念式典が開催され、その式典において、これまでのご支援に感謝の意を表すため、本院の河野病院長より助成会会員の方々へ感謝状を贈らせていただきました。

また助成会からは、本院に対して外来待合場所等に設置する液晶テレビを11台寄贈していただきました。

F R E E

〈フリートーク〉

T A L K



千葉大学医学部附属病院 形成・美容外科教授 佐藤 兼重

手術により何の引け目もなく社会復帰
それが私共の使命、ヤリガイです

見た目だけでなく、機能改善も視野に――

先天性、後天性を問わず、人のあらゆる形態異常や色調異常を外科的手術によって改善し、患者さんの精神的負担を軽減するとともに、何の引け目も感じることなく社会復帰につなげることが、私共(形成・美容外科)の使命です。

近年は、整容面(見た目)だけでなく、機能の改善も視野に入れて治療にあたっており、いわゆる一般的な美容外科とは異なります。

対象とするおもな症例では、**■頭蓋顔面骨変形、顎変形症** **■口唇口蓋裂、耳介、眼瞼などの先天性異常** **■体表面の母斑、血管腫、血管奇形、アザ** **■眼瞼下垂症、眼瞼けいれん** **■顔面神経マヒ** **■リンパ浮腫** **■手足の先天性異常** **■熱傷(やけど)の傷跡**――などがあり、そのほか、美容外科の分野である顔面骨の輪郭形成、シフトリ、二重瞼の形成、隆鼻、豊胸といった症例も扱っています。

「前向きに生活」とお礼の訪問

頭、顔、手足、口や耳などに変形のある先天性異常をはじめ、病気や事故のために体の一部が変形したり、傷跡が残って社会に出ることをためらっている――そんな方々を治療しているわけで、なかには交通事故で頭、顔、手足と、ほとんど全身に及び修復治療をするケースもあります。それらの患者さんが、手術によって回復、改善し、堂々とまた社会の第一線で元気に働いている

姿を目にすること、それが私共形成外科医の生きがいともなっています。

特に、先天性異常を持った子供さんを治療する場合、他と差をつけるつもりは毛頭ないのですが、そのお子さんの「これからの長い人生に思いを馳せ、医師として治療に対する責任の重大さを痛感します。

手術の後、半年、人によっては何年か経って「おかげさまで、前向きに生活できるようになった」「昨年結婚して、子供もできた」と報告とお礼に来ていただいたり、手紙が届くと、実に(医者冥利に尽きる)と嬉しくなります。

幼稚園、小学校入学までに完治して

私共が扱う病気や異常は、その治療に長期間を要するのが一般的です。特に幼児の場合、私共もくわしく説明しますが、保護者が医師の話をよく聞き、その病気や異常について正しく理解し、お子さんが幼稚園や小学校に入る前に(完治)するよう心がけることが何より大切だと思います。

幼稚園や学校で、クラスメイトの心ないひとことが、いわれたそのお子さんの心を深く傷つけて、その後の人生に影響を与えてしまつてことがありますので……。

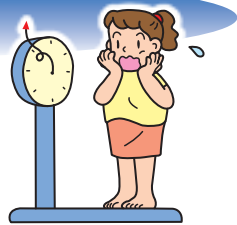
【プロフィール】

●趣味-世界の歴史、日本の歴史に関心があり、特に「集団の大移動と大陸と大海を駆け巡る人間のダイナミズム」に心を引かれます
●家族-妻と2人の息子との4人家族。東京都目黒区に在住。

トピックス

早く適切にダイエット、エクササイズを――

●メタボ、あぶら、ウエスト



「メタボ」や「ウエスト」ということばとともに、メタボリックシンドロームが広く知られるようになりました。そのままにしておくと、動脈硬化や糖尿病になりやすい体質です。

動脈硬化は、血管にあぶらがたまり起きてくることから、血液のあぶらである悪玉(LDL)コレステロールを上げないことが大事です。しかし、メタボの患者さんは悪玉コレステロールに問題はあきません。その代わりに、血液を白くするあぶらである中性脂肪(トリグリセリド)が上がり、善玉のあぶらHDLコレステロールが下がります。あわせて、血圧や血糖が高くなってきます。

これらが、複合的に作用して、動脈硬化を招きやすくなります。これは、私たちのからだのすい臓から出るインスリンが効きにくい体質に変わってしまったことをあらわします。

そのような体質は、運動不足とカロリー、とりわけ脂肪分の摂り過ぎで生じます。通常はみられない脂肪が、内臓の周りについてきます。腹囲(ウエスト径)は、この内臓の周りの脂肪をあらわすもので、男性85cm、女性90cmが目安です。女性基準の見直し(80cm程度)が議論されていますが、内臓脂肪を詳しく測定するには病院でCT検査を行います。

早期に適切にダイエットやエクササイズを行うと、血液の善玉と悪玉のあぶらのバランスが良くなり、血圧、血糖ももとに戻ります。メタボリックシンドロームである場合は、動脈硬化が進まないうちに無理なく今の生活習慣を改善していくことが大切です。

(糖尿病・代謝・内分泌内科 武城英明)

あとがき

地域における医師不足の窮状が、最近マスコミでよく取り上げられるようになりました。千葉県でも、銚子市で医師不足により市立病院が閉鎖される事態となりました。

千葉大学医学部、医学部附属病院は、その源となる共立病院が旧千葉町本町一丁目に住民等の募金で建てられて(1874年、明治7年)、昨年で135年になりました。この間、県内で唯一の国立の医療機関として、地域の基幹病院として、医師を育成し、住民の医療に貢献してきました。本学は、その設立の経緯からも分かるように、住民の命と健康を守ることが使命であり、そのための教育、診療、研究に専心しています。

『千葉大学病院ニュース』を通して、本院がどのように、どんな医師を育成しているのか、どの診療科がどのような医療を実践し、どのような臨床研究を行っているのか――などを皆さんに分かりやすくお伝えし、ご理解いただくことで、本学の使命の一端を果たすことができれば幸いです。

(田邊政裕、病院長補佐・総合医療教育研修センター長)

多鼻 11 むかひ・昔

七天王塚と羽衣伝説



羽衣の松

千葉大学医学部の敷地内と敷地外にある七天王塚には、色々な伝説があります。が、羽衣伝説も残っています。「東金市史 史料編二」に板倉藩士が遺した記録のなかに次のような伝説が記されています。

千葉に行くとき千葉の城跡といわれる畑のなかに、七天王塚と云うところがあった。時、妻は心に迷いが生じて元の天人となつて、行方が分からなくなつてしまつた。その後、七人の子も旅先で亡くなつたので、力を落とした千葉之助は、城内にほおむり、目印のために木を植えた。これが残つて七人塚といふのだらうといふことだつた。

人塚という大きな木があり、その前に七五三がはつてあつた。由来を聞いてみると、千葉之助が、舞い降りた天人を捉えて羽衣を取り上げてしまつた。そのため天人は天に帰れず、千葉之助の妻となり七人の子をもうけた。その時、妻は心に迷いが生じて元の天人となつて、行方が分からなくなつてしまつた。

この説話は「妙見実録千集記」に書かれた千葉常将と天女が出会い、常将が生まれ、このことが天皇の耳に入り常将は従四位に任ぜられたという伝説とは異なつています。また、「千葉伝考記」には、千葉時胤は天人が天に帰つてしまつたことを恐れて羽衣を焼いてしまつたので、若死にしたといふ説話が載つています。七人塚と色々な羽衣伝説、千葉常将の子が七人だつたことなどが結びついて、江戸末期の文久四年(1864)頃には板倉藩士が記した言い伝えが人々に広まつていたのでしょう。

(妙見信仰研究家 宮原さつき)